

とすきり贗



角川小説新書

鷹きりすと



昭和三十一年六月二十日 印刷  
昭和三十一年六月三十日 發行

定價 百拾圓

著者 丸岡明

發行者 角川源義

印刷者 中内あき子

東京都千代田區飯田町一ノ二三

發行所 株式會社 角川書店

東京都千代田區富士見町二ノ七  
振替口座東京一九五二〇八番  
電話九段(33)〇一一(代表)一五

(落丁・亂丁本はお取替へ致します)

Printed in Japan

中光印刷・鈴木製本

埼玉縣立圖書館

# とすり贋

丸岡 明



角川小説新書

川越分館

## 目次

躰きりすと

五

軍 刀

六

同時代に生きる人

二五

あとがき

二五



## 廣きりすと

自動車が二臺、廣島城址の前で止つた。

背の高い青年が、先に止つた車の助手臺から、身輕に飛出て、その城跡で開かれてゐる博覽會の事務所へ這入つていつた。

島三郎の詩碑を建てるために、その下檢分に來た旨を傳へたのであらう。青年はすぐに戻つて來て、その時にはもう車から降りてゐた森田保や、須川修平や、その他の者を城内へ案内した。

——島三郎は廣島出身の詩人だつたが、三月中旬の夜半に、東京で不幸な死を遂げた。間借りをしてゐた家から餘り遠くない、西荻窪と吉祥寺との間の線路に、身を横たへて、自からその生命を絶つたのである。時刻は十一時三十一分頃。島が線路に俯伏せに倒れてゐるのを發見して、電車は警笛を鳴らしたが、間に合はず、そのまゝ五十メートル程ひきずつて、急停車をした。後頭部を碎かれ、腰を轢かれ、片方の脚を切斷されて、即死した。翌朝九時に検屍が來

て、線路の脇に置かれてあつた屍體を檢べた時、まだアルコールの臭ひがしたさうである。餘程酒を飲んでゐたに違ひないと、その役人が云つた。夜半からずつと、巡查と保線工夫とが一人づつ交代で、火を焚きながら屍體の立番に當つた。その夜はまだ寒かつたが、それから二三日すると、急に暖かくなつて、郊外に近いその附近の家では、どこでも梅の花が蕾を開いた……。

島の碑の設計を、特別な氣持から引受けた工業大學の教授である森田博士と、島の友人の一人である須川修平とは、昨日の午後廣島に着いたばかりであつた。驛に着くと、宿へは手荷物置きに立寄つただけで、すぐその足で、繁華街のレストランの二階へいつた。

そこには、この土地の大學教授や、作家や、詩人や、島の中學時代の級友達がゐた。人數こそ十人足らずであるが、その人達は、自分と同じ原子爆彈の體驗者である島の詩碑を、この廣島に建てることに、激しい情熱を持つてゐた。

修平と森田とは、この席で、東京にゐる島の先輩やら友人達の意向を傳へ、今後の手筈の打合せをして、明後日には又東京へ戻らねばならぬので、明日一日で碑を建てる場所を決めようといふことにした。

候補地として擧げられたのは、爆心地の物産陳列館の殘骸附近、城跡内、比治山、それに泉邸又は泉邸裏の、原爆の當日、島が避難をして何時間かを過した川のほとりの五ヶ所であつた。



森田保と須川修平とは、この席での打合せに従つて、翌朝早々に宿へ來たK青年に案内されて、まづ物産陳列館の残骸を見、それからこの城跡へ廻つて來たわけだつた。一行のうちには、森田博士の後輩である縣の建築部長やら、島三郎の長兄やら、島の中學時代の級友やら、こゝと思ふ場所を、いちいちいろいろの角度から寫眞に撮つてくれる筈の、C新聞社の寫眞班などがゐた。二臺の自動車は、一臺が縣の建築部長が提供してくれたもので、一臺がC新聞社の車だつた。

城内は博覽會の開期中ではあるが、普段の日の午前中のことなので、如何にも閑散としたものだつた。そここゝに出來た急ごしらへの建物の一つの天邊には、ラウドスピーカーが取りつけてあつて、たゞやたらに大きな音で、レコードが鳴つてゐた。レコードは、アメリカの喜劇映畫「腰抜け二挺拳銃」の主題歌である「ばつてんぼう」を、女の歌手が吹込んだものである。それを、繰返し繰返しかけてゐるのだ。

一同の者は、赤く焼けて崩れかけた石崖（それは非常に印象的であつた）でとり圍まれてゐる樹形まがたを抜け、日清戦争當時に、大本營になつてゐた建物の焼跡の脇を通り、昔の本丸に向つていつた。

原子爆彈が、廣島の上空で炸裂き裂した時、この本丸にあつた天守閣は、上半分を吹き飛ばされて、なんとも無様な姿になつたものだつたと、一行のうちの一人が話し出した。その話し方に

は、三百五十年前の天正十七年に、毛利輝元がこの土地に来て、地名を廣島と改め、城を築いて天守閣を建てたが、——その天守閣は、明治維新後も、いやついこの間まで、廣島市民達の或る心の寄りどころだつたものだが、と云ふほどの、皮肉な響きが籠こもつてゐた。すると又、他の一人が、原爆を受けたその朝の、この城の附近の有様を話し出した。戦争中、この城内には、中國軍管區司令部があり、防空作戦部なども、こゝにあつたのである。城の入口に近い、練兵場では、丁度兵隊達が訓練を受けてゐる最中だつたのだらう。そこには、夥おびただしい兵隊の屍體がごろごろしてゐた。城の入口にも、壕ぼうの中にも、兵隊の屍體があつたと云ふ。

原爆を受けた負傷者達は、着物を剥はぎ取られ、中には裸同然になつて、顔や手や胸に火傷を負ひ、兩手をオバケと同じようにだらりとさせて、總べての家が押し潰つぶされた街中を、たゞ黙つて馳け廻つてゐたさうだが、この城内からも、さうした兵隊の負傷者達が、あとからあとからと馳け出て來た。兩手を、肩の高さに上げて、だらりとさせてゐるのは、火傷を負つた手を心臓より高く差し上げてゐると、痛みが幾分樂になるので、自然に皆がさうしたものだらうと云ふことだつた。

原爆を受けた瞬間に、上半分を吹き飛ばされた天守閣は、その直後に起きた火災のために、城内の他の建物と一緒に燃えたのである。そして今はその跡に、張りぼての天守閣が建つてゐる。遠目にも、如何にも俗惡な、嫌なものだが（窓などは白壁に、たゞ墨で書いてある）、一

同の者は、碑を建てるに適當な場所を探し探し、この張りぼての天守閣の前まで來た。

一段高くなつたそこからは、城を圍む濠の向うに、バラック建ての小さな家が立ち並んだ街の一部が見える。空襲によつて焼き拂はれた都市では、何處でも見られる風景だつた。

須川修平は、實は昨年四月にもこゝへ來た。須川達の所屬してゐる文化團體が、廣島で平和宣言をすることになつたので、その一行の一人として來たわけだつた。郷里が廣島で、原爆の體驗者である島三郎も、その一行の一人であつた。

その時も、あわたゞしい日程で、驛に着くとすぐ、バスに乘せられて、比治山にゆき、山の上から戦後五ヶ年の街の復興ぶりを見て、それから各所を案内された。原爆の光線の跡が焼きつけられてゐる瓦斯<sup>ガス</sup>タンクを見たり、日赤病院で、原爆患者第一號と呼ばれてゐる全身に火傷の跡のケロイドがある男に逢つたり、大阪銀行の入口の石に残つてゐるやはり原爆の光線による人型を見たり、爆心地の物産陳列館の残骸やら、この城跡を見て廻つた。

城跡はまだ草ぼうぼうで、その代りに、張りぼての醜惡な天守閣などはまだ建つてゐなかつた。防空作戦室のあつたあたりのコンクリートの壕の中には、浮浪者達が住んでゐて、壕の脇から薄く煙があがつてゐた。そして大本營跡の生ひ茂つた草蔭には、戦後の流行で、若い男女が二組、寝轉んでゐたりしたものだ。

あの時に一緒だつた島三郎の詩碑の場所を選びに、今こゝに來てゐるのかと思ふと、須川修

平は異様な氣がした。

城内には結局、碑を建てるに適當な場所が見當らなかつた。しかしこの城内での一番の場所は、入口の枳形の石崖。去年來た時も、この石崖が、須川に深い印象を残したが、原爆の炸裂した熱と、その後の火で、ところどころが變色をし、石の表面がぼろぼろになつてゐるその石崖は、確かに貴重な素材であつた。

碑を建てるに云ふ考へを捨てて、あの石崖を利用するとしたら、どう云ふ風にそれを使ふか。誰が云ひ出すともなく、さう云ひ出すと、自然に皆の氣持が、その方向に向つていった。

一同の者は、先程通つたその枳形の石崖の前へ戻つて來た。原子爆彈が炸裂したのは、そこから南に當る二千メートルの上空である。枳形の石崖と云つても、原爆が炸裂した時の閃光に直射された面と、陰になつた部分とは、石の様子が全く違ふ。

石の表面が變質して、ところどころ赤くなつたりしてゐるのは、原爆の放射線の他に、その時焼けた城門の焰のせもあるのだらうが、石が崩れて變質してゐるのは、そこばかりではなく、光線が直接に當つたと思はれる箇所は、皆同じやうになつてゐた。それを見ても、石の變質した第一の原因は、原爆が炸裂した時の光線のために相違はない。

石崖に使はれてゐる石は、その昔、海邊から運ばれて來たものらしく、その或るものには、未だに貝殻が深く喰込んでゐるのだつた。さうした石の表面が、どれもこれも、ぼろぼろにな

つてゐて、龜裂<sup>きれつ</sup>が見え、叩<sup>たた</sup>くと軽い音がした。

森田博士は上着を脱いで、ネクタイのないワイシャツ姿で、しきりに、石崖の石をさすつて歩いてゐたが、

「こゝですね。こゝに決めませう」と突然大きな聲で云つた。「詩碑を建てるとか、その設計をするなんて云ふことは、思ひ切つてやめにして、この石崖に、銅版でも陶版でもいい、詩を刻んではめ込むんです。この石崖の石は、ね、さう見えませんか。あの日の被害者達の顔。灼<sup>や</sup>けてふくれ上つた、男や女の顔。四倍に大きくなつて、皮膚がべろりとむけて、その皮が垂れさがつてゐたと云ふ顔。それに見えませんか。ね、こゝにしませう。こんな立派な場所なんて、もう他に、ありやアしません……」

高さが二間、長さが十間ほどの石崖を前にして、皆森田の聲を聞きながら立つてゐた。崩れかけた石が積み重なり、その隙間のところどころに、小さい黄色な花がのぞいてゐるその石崖全體は、豪壯な、それでゐて、ちつと悲しみに堪へてゐる感じだつた。須川修平は、賛成した。他の者も、皆賛成だつた。寫眞班の青年は、いろいろの角度から、この石崖を何枚も寫した。

こゝに刻まれる筈の詩は、島三郎が死ぬ直前に、小さな詩の雑誌に發表した「碑銘」と題する四行詩である。

廣島の市民であり、たまたま原爆に遭つた一人の男が、こつそり自作の短い詩を、この石崖

の石の一つに落書をして、死んでいった。島三郎などと云ふ名前は、むしろそこにはない方がよい。銅版になるか、陶版になるか、それはどうでもいゝが、そんな風にその詩が、この石崖の石の一つに残されるかと思ふと、思はず修平の眼に、涙が浮かんで来るのだつた。

ラウドスピーカーから響いて来るガアガアした雑音と一緒に「ぼつてんぼう」の歌は、こゝでも無闇に大きく聞えた。

「どの邊の石にしませう？ 視線が下にゆくやうに、むしろ下の方の石が、いゝんじやないでせうか」

石崖から離れて、その全體を眺めてゐた修平の傍に来て、森田がさう話しかけた。その時、白いズツクの靴を履いた女の先生が、二列に竝んだ小學校の小さい生徒を引率して、石崖の前を通つていつた。手に手に、粗末な紙で出来た日の丸の旗を持つてゐる。多分、製菓會社か何かが、廣告用に、博覽會に入場して来た生徒達に配つたものののだらう。女の先生は、道の水溜りをよけて、小さい生徒にその水溜りを注意しながら、石崖の前を通つてゆく。

「ねえ、歴史がこの前を通つてゆくんです。小學校の生徒が通つたり、家族連れの紳士が通つたり、おばあさんが通つたり……。誰もこの石崖にも、詩にも氣づかない。それでいゝじやあないですか。それでゐて、この石崖は、どんな俗惡な音樂が聞えて来たつて、びくともしやあしないんです。みんな、撥ね返してしまふんです。注意しなければならぬことは、折角のこ

の石崖が、變に修理されてしまはぬことです。このまゝの姿を、永く保存して貰ふことです。こんな立派な、原子爆彈の記念物なんて、他にありやありませんよ」

修平は、草がぼうぼうと生ひ茂り、浮浪者達のゐた去年の城内の風景の方が、もつとよかつたと思ふのだつた。蓮沼のやうな濠と、赤く焼けたゞれて崩れかけた石崖。島三郎はあの時、いつたい、何を思ひながらこの石崖の前を通つていつたのであらうか。

須川修平が初めて廣島の街を見たのは、二十餘年前の昔である。立教大學の學生だつた從兄いとこと一緒に、その父親である伯父の家へ出掛けていつたわけだ。當時修平は、カトリック系の中学校の四年生だつた。そして伯父は、スパルタ教育で鳴らした廣島の縣立中學の校長をしてゐた。從兄は兩親の家に歸ると、急に體の痛みを訴へ、マッサージに來て貰つたりしてゐたが、この時が最後で、それぎり東京へは出て來ずに死んだ。カリエスだつたのを、汽車の疲れぐらゐに考へたのが、間違ひのものであつた。

修平は一週間ほど伯父の家にゐる間に、伯父伯母に連れられて、嚴島いづくしまにゆき、比治山や、泉邸なども見物した。比治山には、日露戦争の時の戦死者達の共同墓地があつた。背の低い、細い棒に、戦死者の姓名と軍隊での階級を書いた一律の墓標が、廣い平らな場所に、碁盤の目になつて竝んでゐた。

死んでもまだ不動の姿勢を崩さずにゐるやうな、この異様な眺めは、戦争の無慈悲さを、修平の頭に強く刻み込んだ。

修平は生意氣盛りの中學四年生のことで、金釦の竝んだ外套の代りに、マントを着てゐた。嚴島では、杓文字を買つて、神戸にゐる知合ひのススキ人の少女に、それに便りを書いて送つた。廣島からの歸りは、たゞ一人だつたのをいゝことにして、神戸で途中下車をして、所番地をたよりに、そのススキ人の少女の家を探した。

汽車の中では、マントにくるまつて寝てゐたが、そのマントを折つて肩に掛け、石疊の神戸の山手の白い坂道を歩いていつた。春休みのことで、歩いてゐると暑かつた。荷馬車の馬が、坂になつた電車道の脇で倒れ、口から泡を吹いてゐた。馬子は大聲で罵りながら、手綱で、その馬に鞭をくれてゐた。

東亞ホテルに向ふ坂道の中に、フレームのある花屋があつた。その花屋の前の細い路地を、探しあぐねて這入つてゆくと、横通りの静かな一區劃に出て、道から五六段石段を登つた黄色いペンキ塗りの大きな二階家が、その少女の家だつた。

丁度修平の眼の高さにある石崖に手をやつて、柵の下から庭を見ると、芝生の庭に、ハンモックが吊つてあり、少女がそれに腰をかけて本を讀んでゐた。半歳逢はずにゐた間に、すっかりその少女が大人らしくなつてゐるので、修平はなんと云つて呼びかけたものか、その言葉に



迷った。

修平が広島へいったのは、その時だけで、その後は、去年の広島ゆきになるわけだが、その間にたゞ一度、広島驛のプラットホームを、感慨深い思ひで歩いたことがある。

戦争の狀態が、いよいよ險けはしくなりかけた昭和十八年に、修平は朝鮮へゆくことになった。末弟の弘雄が應召して、北シナにゐるので、訪ねてやらうと考へて計畫したことだつた。ところが朝鮮にゆけると決る直前に、その末弟の戦死の知らせが來た。

弘雄達が眞夜中に東京を出て、品川驛から広島に向ひ、宇品から釜山に渡つて戦地にいつた道筋を、弘雄の戦死したあとになつて、東京の留守部隊で聞いた。修平は弟が、広島驛で汽車を降りて、いよいよこれで内地とも別れるのだと思つた時の氣持は、どんなであつたらうかと思ふのである。

遺骨はまだ戦地から戻つて來てゐなかつた。修平は朝鮮にゆく途中、僅かな停車時間を利用して、広島驛のプラットホームを歩いてみた。昔、中學生の頃、初めて広島へ來た時には、この驛が出來たばかりで、白いタイルで張つた驛の外観が、一緒にいつた大學生の從兄の自慢であつたのを思ひ出した。

プラットホームには、職人が一人蹲かかみ込んで、警戒線のタイルを埋めてゐた。その白いタイルが、とうの昔に死んだ從兄の自慢話などを思ひ出させたに違ひない。仕事をする脇に、水の